

韓国における学生スポーツ選手の人権問題

——国家人権委員会による実態調査にもとづいて——

呉 永鎬
中村 哲也

はじめに

一九七八年、ユネスコで「体育・スポーツ国際憲章」が採択されて以後、スポーツへの参加を基本的人権のひとつとする考え方¹スポーツ権は、世界中で着実に市民権を得るものとなってきている。日本でも、二〇一〇年八月に文部科学省が公表した「スポーツ立国戦略——スポーツコミュニティ・ニッポン——」において、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を実現することは、すべての人々に保障されるべき権利の一つ」であり、「各人の自発性のもと、各々の興味・関心、適性等に応じて安全かつ公正な環境のもとで、日常的にスポーツに親しみ、スポー

ツを楽しみ、スポーツを支え、スポーツを育てる活動に参画する機会が確保されなければならない」と述べられている。⁽¹⁾

しかし、こうしたスポーツ権思想の広がりにもかかわらず、当のスポーツ界自体が内部に多くの人権問題を抱えている。日本におけるその最たる事例が、指導者から選手へ、あるいは、部内の先輩から後輩へとふるわれる体罰、暴力の問題である。近年話題になった例として、二〇〇五年八月、全国高等学校野球選手権大会に出場する強豪校二校で、指導者から選手に対する暴力行為が発覚した（二校は予選を勝ち抜きながら大会前に出場辞退、もう一校は大会終了後に指導者が辞任）。二〇〇七年六月には、大相撲の力士が親方や兄弟子から暴行を受け、死

亡するという事件も発生した（兄弟子は裁判で有罪判決が確定、親方の裁判は二〇一〇年二月現在係争中）。

こうした問題は、これまでもスポーツ社会学の研究を中心にして批判的にとらえられてきており⁽²⁾、学校の運動部活動が勝利至上主義や商業主義、管理主義教育によって構造化され、生徒の自主性や自発性を軽視してきたことを厳しく批判してきた。個々の研究者による調査では、中学校や高校で運動部活動を経験した者の二〇～四〇％程度が体罰を受けた経験があること、体罰を受けた経験がある者の方が体罰を「必要」「仕方がない」と考える傾向が強いこと、競技レベルが高い選手ほど体罰を受ける傾向が強いことなどが明らかにされている⁽³⁾。

ただ、これらの研究は根本的な認識として、スポーツ界の人権問題は、日本的なスポーツの特徴、あるいは日本国内の問題としてとらえる傾向が強い。先行研究のひとつである中村敏雄の著書のタイトル『日本のスポーツ環境批判』は、そうした認識の枠組みを如実に示している。

しかし現実には、暴力をはじめとしたスポーツ界の人権問題は、日本でのみで発生しているわけではない。ス

ポーツの商業主義化とグローバル化、競技レベルの高度化、低年齢のトップアスリートの活躍といった現象は、世界中のアスリートを巻き込んでおり、そうした中でスポーツ選手の人権問題も世界中で発生するようになっていく。現代のスポーツ界の人権問題を正確にとらえるためには、グローバルな視角が必要不可欠である。

ただ、現在の日本におけるスポーツ研究の状況を見わたすと、日本以外の国や地域における人権問題について得られる情報は決して多くない。情報の少なさが、研究の認識や視角を広げることを阻害する要因の一つになっているとも考えられる。

こうした状況にかんがみたま時、このたび私たちが入手することができた大韓民国（以下、韓国と略記）の国家人権委員会による報告書、『運動選手の人権状況実態調査——中・高校学生選手の学習権、暴力、性暴力実態を中心に』（二〇〇八年十一月）の内容を紹介することには、重要な意味があると思われる。以下、調査に至った経緯、調査方法、調査結果を見ていくことにしよう。

一・韓国におけるスポーツ選手の

人権問題実態調査実施の背景

韓国において、スポーツ選手の人権が社会的な問題として俎上に載せられることになったのは、二〇〇〇年代に入ってからのことである。一九九〇年代に民主化運動があらゆる領域で展開されたにもかかわらず、スポーツ界における選手の人権問題が取り上げられることはなかった。これは、スポーツの現場では、選手に対する人権侵害が「公然たる秘密」や、「どうしようもない現実」として黙認されてきたことを傍証している。⁽⁴⁾

スポーツ界で発生する人権侵害の問題は、国家イメージの向上を至上命題に掲げる「国家主導エリートスポーツ」と形容される韓国のエリートスポーツ政策に関連しているといえよう。リュ・テホ他によれば、エリートスポーツは①国家主導の統制と管理、②少数の限定されたエリート運動選手の育成中心、③生活、学校、スポーツエリートというスポーツ選手がかかわる諸領域間の不均等と断絶をその特徴としており、以下に示す事例からも

明らかのように、スポーツ人権侵害の通底音を成していると考えられる。⁽⁵⁾そこに、スポーツ界の暴力許容の論理⁽⁶⁾と、性別や階層間における非対称な権力関係が重なり、学習権の侵害、暴力・性暴力が生み出されることになるという複雑な様相を呈している。

韓国においてスポーツ選手の人権に対する関心が高まりを見せた契機となったのは、二〇〇〇年一月のプロ野球選手協会（選手協）の結成とそれに対する弾圧等の一連の事件だと言えるだろう。⁽⁷⁾プロ野球選手七五人が、人権上の問題が多い契約の実態を改善しようと協議会の結成を試みた。しかし、韓国プロ野球を総括する「韓国野球委員会」（KBO）はこれを労働運動とみなし、選手協会署名運動に署名した選手全員を自由契約選手（FA）として放出した。これに対して選手協は、制度改善委員会やシンポジウム「韓国プロ野球において選手の基本権はないのか？」の開催、ワークシヨップ「一月中個人訓練決議」等の活動を行った。⁽⁸⁾

シーズン終了後の一月十八日、選手協執行部二八名の選手が参加して再結成を試みたところ、各球団側の強い反発を受け、選手協執行部を主導する選手六名がFA

放出された。これにより選手協とKBOの対立が激化、選手たちが選手協に集団で加入するなどの団体行動に出たのに対し、各球団側は二月二六日に理事会を開き、「事態を解決することができなければ、来年度シーズン試合を中断する」という強硬策をとった。事態は韓国文化観光部の仲裁により収拾したが、この一連の事件をきっかけに韓国社会において、プロはもちろんアマチュアや学生選手たちの人権にも光が当て始められるようになったのである。

一方、学生選手の人権問題は、中学校二年生（当時十四歳）のチャン・ヒジン選手の事件をきっかけに社会の注目を集めるようになった⁽⁹⁾。シドニーオリンピックを控えた二〇〇〇年五月、チャン・ヒジン選手が学業と競技生活を両立しようと、中間テストを受けるために泰陵^{テリヨン}選手村への入村を拒否し、「二学期末試験までもて学校の授業を受けられるようにしてほしい」と要請した。これを受けて大韓体育会は、韓国の代表選手は必ず選手村に入村してトレーニングを受けなければならないとして、彼女の韓国代表資格を剥奪し、さらに一年間代表チームの選抜対象から除外する懲戒処分を下した。

この事態が起こると直ちに、組織的な運動が各地で展開された。特に六月八日には全国の大学の体育関連学科教授たちが、チャン選手の懲戒撤回などを要求する署名運動を展開し、わずか三日間で二五大学、二〇〇名以上の教授の賛同を集めた。運動では、「チャン選手の懲戒問題は、選手個人の問題ではなく国家エリートスポーツ至上主義という韓国スポーツの構造的矛盾から派生した結果」であると指摘し、韓国スポーツの構造改革を促した。

しかし選手村側は「選手村入村は国の代表の義務である」「国の代表として個人が犠牲を甘受することは当然である」と表明した。また大韓体育会のキム・ウンリョン会長は「特定選手のために一国の体育政策が揺れてはいけない」と、運動側の要求を一蹴し、チャン選手の懲戒処分が撤回されることはなかった。この事件は、韓国のエリートスポーツ政策及び勝利至上主義、またそれに基づく制度と心性がもつ抑圧性と閉塞性を端的に示していると言える。

これに対し、「スポーツ部門は改革の無風地帯として残り、奇形的スポーツシステムと歪曲されたスポーツ文化が存続」しているという現状認識のもと、「韓国最初のス

スポーツ分野のNGOとして、政府とスポーツ団体のスポーツ政策の監視と批判、全ての国民のためのスポーツ政策の代案を提示」することを目的に二〇〇二年五月八日、「体育市民連帯」が結成された。¹⁰⁾ 体育市民連帯は上述の運動に参加した大学教授や教師たちを中心としつつも、スポーツ界関係者だけにとどまらず、弁護士、医師、言論人等の専門家、保護者や児童・生徒といった市民をも含めて構成されている。発足以来、モニタリングや署名運動、政策提言、セミナー、シンポジウム、公聴会、討論会等様々な活動を展開し、スポーツ界における人権状況の改善を牽引している。

また、二〇〇三年三月二六日、忠清南道天安市盛況洞天安小学校サッカー部合宿所で火災が発生し、眠っていた八名のサッカー選手が死亡、一六名が負傷する事件が発生した。女子ショートトラックの代表選手に対する殴打事件も発覚し、合宿所生活・合宿訓練というシステムがもつ問題点や、スポーツ界における常習的な暴力行為など、性別と指導者―選手間といった非対称的な権力関係を基盤にして、スポーツ選手を抑圧する現実が明るみになっていった。こうしたなかで、国会や言論界、イン

ターネットにおいてスポーツ選手の人権問題に対する関心が本格的な高まりを見せていった。

その結果、大韓体育会は「選手暴力根絶対策委員会」を設置し、ソウル大学スポーツ科学研究所に選手暴力実態調査を依頼して調査を実施した。こうして、スポーツ選手の人権と関わる韓国最初の大規模な調査として、二〇〇五年選手暴力実態調査（ソウル大学スポーツ科学研究所、研究責任者・ラ・ヨンイル）が行われた。¹¹⁾

このような韓国スポーツ界における暴力及び人権問題とそれに関連する動きを背景として、国家人権委員会はこれを韓国社会の重要な人権上の懸案と捉え「スポーツ分野における人権向上事業」を開始した。その一環として、二〇〇六年の小学生運動選手を対象にした人権状況の実態調査、二〇〇八年の中・高校生運動選手を対象にした実態調査が行われた。

二. 実態調査の視角、目的、方法

二〇〇八年の実態調査は国家人権委員会の支援と梨花^{イフファ}女子大学校産学協力団の主導のもと、五月から十月にか

けて調査・研究が行われた（研究責任者…イ・ミョンソン、梨花女子大学校韓国女性研究院、客員研究委員）。そして、十一月に、国家人権委員会『運動選手の人権状況実態調査―中・高校学生選手の学習権、暴力、性暴力実態を中心に』（以下、『実態調査』と略記）が発行された。

研究の視角

本研究は、韓国において学習権、暴力、性暴力のそれぞれに対する実態調査や理論的検討が行われてきた一方、これら三者を関連づけた先行研究が皆無であるという状況にかんがみて、調査と分析の際に以下の三つの視角を設定している。すなわち、①国家主導のエリート体育パラダイムがどのように学生選手の人権侵害問題を惹起しているのか、②韓国スポーツ界の男性的文化と暴力許容文化が学生選手に対する暴力をどのように助長、黙認しているのか、③性暴力の発生構造は何であり、これは暴力の発生と構造的にどのような連関性をもつものなのか、というものである。⁽¹²⁾

研究報告書タイトルに端的に示されているように、研究は一般のスポーツ界やスポーツ選手ではなく、「学生選

手」をその研究対象としている。ここである「学生選手」とは、学習権、暴力、性暴力という三つの概念が複層的に展開しながら人権侵害が発生する様態を適確に浮かび上がらせる「場」としての学生選手を意味している。それは同時に、学生選手たちが置かれている人権侵害の深刻な状況を、より立体的に考察させることを可能とさせると考えられているからである。

また、これは調査の主たる企図した所ではないが、教育――とりわけ学校がもつ、抑圧性を内包した規範や価値基準を再生産し、それを強いる権力性あるいは権力構造に加担しうる性質からも、学生選手を対象にした以上、目を逸らさずにはいられないであろう。⁽¹³⁾

研究の目的

本研究は、国家人権委員会の「スポーツ分野人権向上事業」の一環として行われ、中・高等学校学生選手の学習権、暴力、性暴力の実態を中心に、人権状況全般に対する実態調査を実施することによって、具体的な現実と問題点を把握し、その根本的な予防と改善のための制度改革及び政策法案を模索することを目的としている。⁽¹⁴⁾

学習権、暴力、性暴力を学生選手の人権侵害を評価する主要指標とする根拠としては、①研究対象が学生選手であるということを考慮した時、学生選手たちが学生として情緒的、認知的成長を可能にし、未来を準備できる条件にあるのかどうかという側面は大変基礎的な指標である、②その集団を構成する個人の身体的・精神的・情緒的自律権が他人や外部の力による暴力や強制から自由な状態を、人権尺度の重要な基準の一つとして、運動部内において発生する暴力実態を探索、③個人の自律権概念、さらに性的自律権または性的自己決定権に対する侵害の有無を人権侵害の指標とし、性暴力実態に接近するという三つが挙げられている。⁽¹⁵⁾

調査方法

本調査の方法は以下の通りである。⁽¹⁶⁾

ア. 設問調査

二〇〇八年五～八月まで、全国中・高等学校運動部の学生一一三九名を対象に実施した。地域別と種目別は、標本収集の過程で統計分析上有意とみなせないと判断し、性別、学年別の変数を中心に統計分析を行った。設問紙

の内容は、大きく学習権、暴力、性暴力の経験や意識について測定する質問。また、一般的事項も含ませている。

イ. 深層面接

調査は、中学生一四名、高校生一六名（女性二一名、男性九名…団体種目一六名、個人種目一四名）の学生選手三〇名を対象に、二〇〇八年五～九月まで実施された。構造化された質問紙を用い、一対一面接調査で行われた。面接は平均で約一時間半、ラポールがうまく形成された場合には、二～三時間行われることもあった。全国のような地域の学生選手を対象としている。学生選手たちの練習や進路選択の過程、スポーツと学習を並行する難しさ等の全般的な問題から始まり、人権侵害被害と関連した個別的経験、被害に及んだ脈略や関係、状況等を中心に面接は行われた。

ウ. 専門家インタビュー／諮問

スポーツ学者四名、女性学者二名、暴力及び性暴力関連市民団体関係者三名、政策担当者一名を対象に、スポーツ人権に関する政策の現状と課題についてインタビュー及び書面諮問を実施した。

エ. 文献研究

才、その他

国家人権委員会が開催した保護者懇談会での意見や経験、討論内容等を分析や参考資料として用いた。

三、実態調査の結果の概要

設問調査の結果⁽¹⁷⁾

実態調査の結果の概要は以下の通りである。まず設問調査の結果を見てみよう。学生選手たちの正規授業参加時間は、試合がある時で平均二時間、ない時は平均四・四時間程度であった。八二・一％が補習はほとんど行われていないと回答しており、授業欠損率は深刻な状況にあった。

暴力については、調査の対象となった学生の七八・八％が経験しており、その内の二五％は一週間に一〜二回以上、五％の学生が毎日、練習やトレーニングと関係のない暴力を経験していた。暴力の主な行為者は、コーチや監督等の指導者であり、暴力が発生する主な場所は、運動場や体育館などのトレーニング施設であった。指導者による暴力の次に、先輩・後輩や同輩による暴力も多

く回答されており、特に練習やトレーニングと関係のない暴力の場合、先輩が主な暴力行為者になると分析された。

体罰等の暴力による被害の影響は「スポーツをやめた」と考えるようになるという回答が最も高かった（五六・四％）。体罰の効果に対する一般的通念とは異なり「練習をもっと熱心にやらなければならないと考える」という回答は二〇・一％に留まった。特に「スポーツをやめた」という回答には、性差が有意に表れており、女子学生が六六・四％、男子学生が四七・一％と、暴力が女子選手により否定的影響を与えるものと分析されている。

暴力への対処方法としては、「耐えたり知らないふりをする」等の消極的対処が「嫌だと言ひ、やめろと要求する」等の積極的対処より支配的であり、女子学生より男子学生がより消極的な対処傾向を示した。

一方、「言語的セクハラ」「強制的な性関係の要求」「レイプ」などの性暴力については、調査対象者の六三・八％が被害を受けた経験があると回答している。類型別に見ると、「言葉によるセクハラ」が五八・五％と最も高く、続いて「強制わいせつ」が二五・四％を占める。「強姦」

や「強制的な性関係の要求」も各一・一％と一・七％を示した。このような被害の割合は、学生選手が日常的に性暴力の被害を経験していることをうかがわせるものであり、深刻な状況にあるといえよう。性暴力行為者は暴力行為者とは異なり、「指導者と選手の間」以上に、「先輩・後輩関係」で最も多く発生している。被害場所は主に「合宿所」や「寄宿舎」になっている。

性暴力被害がどのような影響を与えるのかという回答も、やはり「スポーツをやめたくない」(四六・七％)が最も高く、次に「腹が立つ」(四五・九％)、「恥ずかしく侮辱感を覚える」(四一・八％)を示した。この回答にも性差が有意に表れており、男子学生は「腹が立つ」(五四・七％)という回答が最も多い一方で、女子学生は「スポーツをやめたくない」(五四・七％)という回答が最も多かった。

性暴力に対する対処は暴力のそれと比べて、「嫌だとはつきり言って、やめろと要求する」等の積極的対処の意志を見せる比率が高く示された(五九・六％)。積極的に対処しない理由としては「選手生活に不利になるような気がして」(三三・二％)、「恥ずかしく動揺してしまっ

て」(三二・九％)、「対応方法を知らず」(二九・七％)といったものが上位を占めた。調査において、学生選手たちが「スポーツをやめる意思をもった」と回答した比率は平均八六・二％であり、男子学生より女子学生の方が高い値を示した。

面接調査の結果⁽¹⁸⁾

続いて、面接調査の分析結果の概略に移ろう。

学習権に関した内容では、学生選手たちは英語や音楽、体育など特定の科目しか授業を受けられない状態にあり、学習権侵害の状態で放置されていた。授業欠損は深刻で、多くの者が学力を極度に委縮された状態にあったと言える。学習権侵害は暴力と性暴力を黙認する主要な土台であり、また学生選手の人権侵害の構造的な背景として作用すると分析されている。すなわち、学生選手が低い学力水準に抑えられたままでいることが、スポーツ以外の分野に自分の将来を選択することを制限させ、現在自らに加えられる暴力や性暴力といった人権侵害にも抵抗することを不可能にする機制として機能するのである。

学生選手に対する指導者の暴力は日常的であり、往々

に体罰という名目で、暴力行為者の感情の爆発や学生選手の人格を侮辱するという形で表れるということが明らかになった。暴力は学生たちの練習やトレーニング、または実力向上のための必要悪として容認されているが、実際には学生選手たちの士気や自尊心低下を招来し、運動意欲を消失させていると分析されている。指導者の暴力は、学生選手間の暴力と殴打文化を再生産する主要な要因として作動しており、指導者―先輩―後輩と連なる加害者―被害者連鎖の悪循環が再生産されている。

性暴力は先輩・後輩や同輩間に、そしてコーチ等の指導者と学生選手間に発生し、これら性暴力の発生は不平等な権力構造やヒエラルキー的な暴力文化と構造的に連関している。スポーツ現場における性暴力は、指導者による体罰や練習やトレーニング、親密であることを装ったセクハラ、あるいは先輩・後輩間の暴力や体罰の一つの方式として現れる。この過程で、暴力の加害者が性暴力の加害者または潜在的加害者として、時空間的な次元で相互連関性を持ちながら生まれているとされる。暴力に対する対応が構造的に難しいのと同じように、性暴力被害者は、指導者や先輩・後輩間のヒエラルキーにより性暴力への対応を回避した

り、積極的に対応する場合も適切な解決策を探せない状況に置かれていると分析された。

こうした深層面接調査の結果は、設問調査の結果を下支えするものであり、人権侵害が発生する構造と学習権、暴力、性暴力の相互連関性が浮き彫りになったといえよう。

おわりに

これまで見てきたように、韓国国内における学生スポーツ選手に対する人権侵害は非常に深刻な状況にある。

ただ、メディアによる報道や各種調査を受けて、韓国国内でもスポーツ選手の人権問題に対する社会の認識は高まってきており、世論の後押しを受けるかたちで様々な対策がとられるようになっていく。一例をあげると、「選手苦情処理センター」の設置、三度暴力行為を行った指導者をスポーツ界から追放する「三振アウト制度」の導入、小・中学校における運動部の寮や合宿所の廃止、国会での「学校スポーツ正常化のための促進決議案」議決などである。もちろん、これらの対策によってスポーツ界に人権問題がなくなったわけではないが、スポーツ界

の民主化は着実に前進しつつあるといえよう。

スポーツ界における人権問題を調査・研究し、スポーツ界の人権侵害を少しでも減らしていこうとする取り組みは、韓国だけにとどまらない。そうした動きの代表例が、イタリアのフィレンツェにある国連児童基金（UNICEF）イノチェンティ研究所が二〇一〇年七月に発行した報告書“Protecting Children From Violence in Sport – A Review with a Focus on Industrialized Countries”である⁽¹⁹⁾。

この報告書では、「子どもの権利条約」一九条に基づいて、暴力とは「あらゆる形態の身体的、若しくは精神的な暴力、傷害若しくは虐待、放置若しくは怠慢な取扱い、不当な取扱い又は搾取（性的虐待を含む。）」という広範な定義を採用し、各国のスポーツ界で発覚した様々な人権侵害の実例を報告している（日本の事例では、力士暴行死事件が取り上げられている）。スポーツ界における人権問題は、世界レベルで取り組むべき重要な 이슈 となりつつあるといえよう。

こうした世界の動きにもかかわらず、日本国内ではスポーツ選手の人権問題に対する意識は、まだまだ高いとは言えない。暴力問題は、先に例に挙げたように、相撲

や野球といった個別の競技レベル、競技団体の問題としてとらえられているにすぎない。二〇〇七年に発生した高校野球の特待生問題では、スポーツ特待生の可否とスポーツ選手の学力、授業の保証・補償が最大の論点となった。しかし、世論の大勢を占めたのは「特待生を認めないのは時代遅れ」「野球だけ特待生を認めないのはおかしい」といった論調であり、スポーツ選手の学習権保障の重要性に対する認識はきわめて低い水準にある（二〇一〇年に改正された日本学生野球憲章では、選手のエduをを受ける権利の保障が明記された）。

それを反映するかのように、日本におけるスポーツ選手の人権問題の調査は小規模なものにとどまっており、本格的な全国調査が行われたことはない。スポーツ界の性暴力に関する調査などは、おそらく皆無であろう。日本のスポーツ界における人権問題の実態は、基本的な情報すらほとんど把握できていないのが現状である。

グローバルゼーションが、世界的な文化の共通性と地域的な差異の両面をもたらすものと考えらるならば、スポーツにおける人権問題も普遍的な共通点と地域的な特殊性の両面から分析される必要があると思われる。それを

明らかにするためにこそ、日本でもまずは基本的な実態調査を実施することが急務になっていると思われる。

参考資料

以下、『実態調査』の結果のうち、スポーツ選手に対する暴力・性暴力の内容を参考資料として提示する。本項で取り上げる調査項目は、ほとんどの設問が複数回答であるため、以下の表では n および各質問への回答をパーセンテージで示している。それにより、韓国のスポーツ選手が、様々な種類の暴力・性暴力を様々な関係者から受けている実態が見て取れることと思われる。

表 1 暴力経験の有無

暴力類型 (n=1139)	あり	なし
1－①運動部で練習と関係なしに怒られたりぶたれたことがある	44.4%	55.6%
1－②運動ができなかったり練習態度が悪いと、気合いやオルチャリヨを受けたことがある	64.3%	36.6%
1－③運動ができなかったり練習態度が悪いと、侮辱的な言葉や悪口を受けたことがある	59.1%	40.9%
1－④運動ができなかったり練習態度が悪いと、ぶたれたことがある	49.3%	50.7%
1－⑤運動部で服を脱げという体罰や気合いを受けたことがある	7.0%	93.0%
上記の中の暴力を一つでも受けた経験がある	78.8%	21.2%

註 1：1－①から 1－⑤までは複数回答。註 2：表中の「気合い」と「オルチャリヨ」はともに俗称であり、団体内の規律維持やしごきという名目で団体成員に与えられる、身体的及び精神的罰を与える行為を指している。

典拠：『実態調査』三八頁、表Ⅲ－８より作成。

表 2－1 暴力行為者との関係（女子）

区分	コーチ	監督	友だち	先輩後輩	その他
1－①(n=232)	36.6%	10.8%	2.2%	61.6%	1.3%
1－②(n=358)	72.9%	14.5%	0.0%	29.9%	0.0%
1－③(n=337)	66.5%	24.0%	1.2%	32.6%	1.5%
1－④(n=263)	84.4%	14.8%	0.0%	11.0%	0.8%
1－⑤(n=25)	64.0%	4.0%	0.0%	48.0%	0.0%

註 1：複数回答。各項目は、各行の n を 100%とした中に占める割合を示す。註 2：表中の「1－①」等の番号は、表 1 内の番号と対応している。すなわち 1－①は「運動部で練習と関係なしに怒られたりぶたれたことがある」という設問への回答である。以下同じ。

典拠：『実態調査』四五頁、表Ⅲ－１７より作成。

表 2－2 暴力行為者との関係（男子）

区分	コーチ	監督	友だち	先輩後輩	その他
1－①(n=260)	35.4%	13.5%	5.4%	59.6%	3.5%
1－②(n=353)	69.4%	16.4%	0.3%	32.3%	1.1%
1－③(n=314)	64.6%	21.7%	1.6%	31.8%	1.6%
1－④(n=279)	68.5%	17.6%	0.0%	28.7%	1.4%
1－⑤(n=51)	41.2%	17.6%	0.0%	51.0%	2.0%

註 1：複数回答。各項目は、各行の n を 100% とした中に占める割合を示す。

典拠：『実態調査』四五頁、表Ⅲ－17より作成。

表 3－1 暴力を受けた場所（女子）

区分	合宿所	試合場	練習所	移動車両	ロッカールーム	コーチ室	試合後のミーティング	閑寂な場所	その他
1－① (n=229)	52.8%	7.0%	41.9%	1.3%	4.8%	1.3%	1.3%	1.7%	15.3%
1－② (n=348)	18.1%	5.5%	83.6%	0.3%	3.4%	1.1%	1.1%	1.1%	4.6%
1－③ (n=330)	17.3%	6.4%	87.6%	3.0%	3.6%	1.5%	1.2%	0.9%	4.8%
1－④ (n=254)	8.7%	2.8%	92.1%	1.2%	2.8%	0.8%	0.8%	0.4%	2.8%
1－⑤ (n=25)	16.0%	16.0%	64.0%	4.0%	8.0%	4.0%	4.0%	0.0%	20.0%

註：複数回答。各項目は、各行の n を 100% とした中に占める割合を示す。

典拠：『実態調査』四七頁、表Ⅲ－18より作成。

表 3－2 暴力を受けた場所（男子）

区分	合宿所	試合場	練習所	移動車 両	ロッカ ールー ム	コーチ 室	試合後 のミー ティン グ	閑寂な 場所	その他
1－① (n=90)	12.2%	2.0%	11.7%	1.1%	2.5%	0.5%	0.9%	0.6%	5.2%
1－② (n=346)	16.5%	3.5%	78.9%	0.9%	6.1%	0.0%	1.2%	2.0%	5.5%
1－③ (n=308)	15.9%	6.5%	83.1%	1.9%	6.5%	1.0%	0.6%	0.6%	5.8%
1－④ (n=269)	17.1%	3.0%	81.4%	0.4%	8.2%	0.4%	0.7%	1.9%	5.2%
1－⑤ (n=50)	30.0%	6.0%	62.0%	2.0%	12.0%	0.0%	4.0%	6.0%	12.0%

注：複数回答。各項目は、各行の n を 100%とした中に占める割合を示す。

典拠：『実態調査』四七頁、表Ⅲ－１８より作成。

表 4 暴力経験に対する態度

区分	女子 (n=536)	男子 (n=573)
①何も感じない	2.2%	9.9%
②憂鬱だ	10.8%	8.7%
③腹が立つ	44.4%	46.1%
④怖い	12.1%	5.8%
⑤スポーツをやめなくなる	66.4%	47.1%
⑥恥ずかしく侮辱感を覚える	23.5%	15.5%
⑦当然だと思い耐える	6.5%	11.3%
⑧練習をもっと熱心にやらなければならないと思う	14.2%	25.7%
⑨いつかは復讐しようと思う	15.7%	20.9%
⑩その他	2.6%	5.1%

注：複数回答。男女それぞれの n は元のデータより算出。両者の合計は 1109 となり、サンプル合計 1139 とは合わないが、誤差 30 は無回答と推測される。

典拠：『実態調査』四八頁、表Ⅲ－１９より作成。

表5 性暴力経験

性（暴力）経験実態（n=1139）	あり	なし
5－①服を着替えたり休んでいる時、ノック無しにこっそりと入ってこられたことがある	43.9%	56.1%
5－②体（胸、尻、足等）をジロジロと見続けられたことがある	21.8%	78.2%
5－③体や外見に対し、冗談を言われたり、馬鹿にされたことがある	58.5%	41.5%
5－④私の前で故意にズボンを下ろしたり、体を見せられたことがある	9.6%	90.4%
5－⑤他の人がいる前で猥褻な動画を見せたり絵をつけられていたことがある	10.6%	89.4%
5－⑥頬にキスをしろと強要されたり強制的にキスされたことがある	11.2%	88.8%
5－⑦膝の上に座らせられたり、許可なく体に寄りかかってくる	18.8%	81.2%
5－⑧体（肩、胸、尻、足、腰等）を許可なく触られたことがある	19.6%	80.4%
5－⑨服を脱がせたり、脱げと言われたことがある	6.3%	93.7%
5－⑩強制的に性関係を要求されたことがある	1.7%	98.3%
5－⑪強制的に性関係を要求され、どうしてもなくやったことがある	1.1%	98.9%
上記の中の性暴力を一つでも受けた経験がある	71.8%	28.2%

註：5－①から5－⑪までは複数回答。

典拠：『実態調査』五四頁、表Ⅲ－２２より作成。

表6－１ 性暴力行為者との関係（女子）

区分	コーチ	監督	友だち	先輩後輩	その他
5－①(n=221)	21.3%	10.9%	42.5%	44.3%	8.6%
5－②(n=124)	30.6%	16.1%	29.0%	43.5%	10.5%
5－③(n=325)	30.5%	12.6%	43.4%	53.5%	2.5%
5－④(n=36)	8.3%	0.0%	22.2%	69.4%	11.1%
5－⑤(n=34)	5.9%	2.9%	58.8%	47.1%	11.8%
5－⑥(n=54)	31.5%	16.7%	14.8%	27.8%	16.7%
5－⑦(n=103)	17.5%	8.7%	40.8%	43.7%	6.8%
5－⑧(n=113)	24.8%	13.3%	32.7%	37.2%	9.7%
5－⑨(n=20)	10.0%	15.0%	15.0%	75.0%	5.0%
5－⑩(n=6)	0.0%	0.0%	66.7%	33.3%	0.0%
5－⑪(n=3)	0.0%	0.0%	33.3%	66.7%	0.0%

註：複数回答。各項目は、各行のnを100%とした中に占める割合を示す。

典拠：『実態調査』六六～六八頁、表Ⅲ－３７より作成。

表 6-2 性暴力行為者との関係（男子）

区分	コーチ	監督	友だち	先輩後輩	その他
5-①(n=246)	19.1%	4.5%	56.9%	52.0%	3.3%
5-②(n=94)	10.6%	7.4%	55.3%	47.9%	9.6%
5-③(n=285)	11.9%	4.2%	58.2%	59.3%	1.4%
5-④(n=66)	7.6%	0.0%	42.4%	65.2%	1.5%
5-⑤(n=72)	0.0%	0.0%	68.1%	51.4%	1.4%
5-⑥(n=65)	7.7%	1.5%	29.2%	58.5%	6.2%
5-⑦(n=95)	5.3%	0.0%	47.4%	57.9%	4.2%
5-⑧(n=99)	7.1%	2.0%	55.6%	59.6%	3.0%
5-⑨(n=44)	11.4%	6.8%	13.6%	75.0%	0.0%
5-⑩(n=12)	0.0%	0.0%	16.7%	66.7%	16.7%
5-⑪(n=8)	0.0%	0.0%	12.5%	62.5%	25.0%

注：複数回答。各項目は、各行の n を 100%とした中に占める割合を示す。

典拠：『実態調査』六六～六八頁、表Ⅲ-37より作成。

【注】

- (1) 文部科学省HP、http://www.mext.go.jp/b_menu/hondo/2010/08/26/1297039_02.pdf、二〇一〇年二月二八日閲覧。
- (2) おもな研究として、城丸章夫『体育と人格形成』、青木書店、一九八〇年、森川貞夫『スポーツ社会学』、青木書店、一九八〇年、牧野共明「スポーツにおける根性主義」、伊藤高弘他編『スポーツの自由と現代 上巻』、青木書店、一九八六年、五五～六八頁、今橋盛勝他編著『スポーツ「部活」』、草土文化、一九八七年、城丸章夫他編『スポーツ部活はいま』、青木書店、一九九一年、中村敏雄『日本的スポーツ環境批判』、大修館書店、一九九五年、内海和雄『部活動改革—生徒主体への道—』、不昧堂出版、一九九八年、など。
- (3) 阿江美恵子「運動部指導者の暴力的行動の影響 社会的影響過程の視点から」、『体育学研究』、四五巻一号、二〇〇〇年一月、日本体育学会、西坂珠美・会田宏「高等学校のクラブ活動における指導者の暴力行為」、『武庫川女子大紀要（人文・社会科学）』五五号、二〇〇七年、武庫川女子大学、高橋豪仁・久米田恵「学校運動部活動における体罰に関する調査研究」、『教育実践総合センタ

「紀要」一七号、二〇〇八年三月、奈良女子大学。

各調査の実施時期、調査対象者数、体罰経験者の割合は下表の通り。

- (4) チョン・フィジュン「女性を脅かす体育会の構造的暴力と根付いた慣行、そして代案」、韓国女性民友会・文化連帯主催「スポーツする女性を脅かす暴力と差別…それに対抗するとても常識的な代案」、討論会資料集、二〇〇七年、参照。以下、朝鮮語は呉永鎬がすべて翻訳した。

- (5) リュ・テホ他「学校体育政策に関する制度改善に関する研究」、教育人的資源部、二〇〇三年。

- (6) ソウル大学スポーツ科学研究所「選手に対する暴力行為の実態及び根絶対策」大韓体育会、二〇〇五年や、ハム・ジョンヘ・パーク・ヒョネ「運動選手に対する暴力被害防止のための法的、制度的法案に対する哲学的接近」、韓国女性体育会編『韓国女性体育会誌』、第二

一卷第二号、を参照。

- (7) 以下、選手協の事態に関しては、「KBOはブックを打ち、

	阿江	西坂・会田	高橋・久米田
調査時期	1994～95年	2006年	2006年
調査対象者数	596	226	278
体罰経験者の割合	37.4%	28.8%	25.6%

球団はチャングを打ち あらゆる妨害の中で行われた選手協定期総会―選手たち内憤重なる寒い冬」、『ハンギョレ21』、二〇〇〇年十二月二〇日付、「選手協波動、急いで縫合」、『東亜日報』、二〇〇一年一月二一日付、を参照した。

- (8) 韓国プロ野球選手協会ホームページ (<http://www.kbpba.net>) を参照。二〇一〇年二月二十五日閲覧。

- (9) チャン・ヒジン選手の事件に関しては、「エリートスポーツに怒りが込み上がる。学業並行要求 選手村離脱チヤン・ヒジン波紋」：体育当局子どもじみた対応で一貫」、『ハンギョレ21』、二〇〇〇年六月二二日付、を参照した。

- (10) 体育市民連帯ホームページ (http://sportscm.org/site/index.php?option=com_content&task=view&id=12&Itemid=19)。二〇一〇年十二月二十五日閲覧。

- (11) 十六市・道（済州道を除く）の小・中・高・大学校代表レベル運動選手、指導者及び父兄、国家代表選手及び指導者を母集団とし、二七五校の学校から大韓体育会に登録している一八種目の学生運動選手たちと八種目の国家代表選手二〇四〇人に対して行われた、最初の大規模調査である。研究内容は殴打に対する認識及び態度、殴打実態、殴打改善及び根絶対策などである。調査により、

七八・一％の選手が殴打経験があり、七六・五％が小学生時から運動現場での殴打経験あることが明らかになった。また国家代表選手の場合でも四・九％の殴打行為が性別に関係なく行われていた。学校の運動部から国家代表チームに至るまで暴力は依然として存在し、五八・四％の選手が週一回以上、常習的に殴打されている事実が明らかになった。

(12) 『実態調査』、一九頁～二六頁参照。

(13) 学校制度が持つ権力性に関しては批判的教育学者たちが論じている。例えば、マイケル・W・アップル著、浅沼茂・松下晴彦訳『教育と権力』、日本エディタースクール出版、一九九二年、等を参照。

(14) 『実態調査』、五頁、参照。なお本研究では学習権、暴力、性暴力を以下のように定義している。学習権…「教育から差別・排斥されない権利」。暴力…団体生活、練習過程及び成績不振等の理由で身体に与えられる体罰及び殴打等の「身体的暴力と人格冒瀆や屈辱感を与える」「言語的暴力」の二つが含まれる。性暴力…意思に反する視覚的、言語的、身体的な性的言動を全て含む。

(15) 『実態調査』、五～六頁、参照。

(16) 『実態調査』、七～一四頁、参照。

(17) 『実態調査』、三一～一〇八頁、参照。詳しい調査結果に

については、適宜文末に付した参考資料を参照していただきたい。

(18) 『実態調査』、一〇九～一四五頁、参照。

(19) 報告書は、以下のサイトで全文の閲覧が可能となっている。
http://www.unicef-irc.org/publications/pdf/violence_in_sport.pdf。二〇一〇年十二月二五日閲覧。